

〈研究・調査報告〉

## 大学間国際交流協定に基づく短期教員研修留学 プログラムの確立（その1）

### 高知大学とスウェーデン・イエーテボリ大学間の 国際交流促進及び大学の地域貢献を目的として

是 永 かな子

#### 要 旨

高知大学とイエーテボリ大学との大学間協定を基盤とし、国際交流の促進及び大学の地域貢献に資することを目的として、短期教員研修留学プログラムを試行した。具体的な研修の内容は、研修プログラムの起案、派遣教員の選考、研修事前学習の実施、研修の実施、研修事後学習および研修成果の公開報告会の開催であった。今回の短期教員研修留学プログラムによる成果とともに、今後交流を継続する上での課題も明らかになった。

#### 【キーワード】

大学間国際交流協定、短期教員研修留学プログラム、イエーテボリ大学、国際交流、地域貢献

#### 1. はじめに

2006年4月から高知大学とスウェーデン・イエーテボリ大学は全学協定を締結し、学术交流と学生交流を推進することとなった。高知大学は教育学部、人文学部、理学部、農学部、医学部によって構成される大学であり、イエーテボリ大学は教育学部、人文学部、理工学部、医学部、経済学部、社会学部、芸術学部、情報学部を有し、教職員約5,000人、学生・院生約50,000人の規模の大学である。全学協定を有効に活用するため、2006年度から様々な交流事業に着手した。今回は第一報として、2006年度の取組について報告する。

2006年度は以下の短期研修を4回企画・実施した。以下に第1回、第2回、第3回、第4回の内容を示す。

表1. 2006年度の短期研修

第1回短期研修	テーマ：スウェーデンの看護教育の実際を学ぶ
参加者：	高知大学教育学部教員1名、高知大学医学部教員3名
第2回短期研修	テーマ：スウェーデンの障害児教育の実際を学ぶ
参加者：	高知大学教育学部教員1名、高知大学大学院生2名、現職教員3名
第3回短期研修	テーマ：スウェーデンの病気をもつ子どもの教育の実際を学ぶ
参加者：	高知大学教育学部教員1名、大学教員2名
第4回短期研修	テーマ：スウェーデンの特別ニーズ教育の実際を学ぶ
参加者：	高知大学大学院生1名、高知大学教育学部学生7名、現職教員2名

他にも、高知大学からは、高知大学人文学部教員が1年間イエーテボリ大学経済学部において研究を行った。イエーテボリ大学からは、2006年度以降1年間の長期留学生在が毎年3名ずつ派遣されている。また、イエーテボリ大学人文学部日本語学科の教員2名も高知大学を訪れて、国際交流に関する意見交換を行った。2007年4月にはイエーテボリ大学の研究協力校である基礎（小・中）学校の教員5名が来高して、附属特別支援学校や公立小学校などの視察を行った。1年間の交流実績は以下である。

表2. 2006年度の交流実績

研究者		学生・大学院生		現職教員		合計	
受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣
2	9	4	10	5	5	11	24

2006年度の実績を検討すると、3人の1年間の長期留学生在以外は短期の研修であった。そのため高知大学側もイエーテボリ大学側も、研究者・学生・大学院生・現職教員問わず、長期滞在・留学は困難であるが、短期滞在・研修は可能であり、ニーズも高いことが明らかになった。またとくに現職教員は、教育実践を日々担っているにもかかわらず派遣人数が少なく、種々の事情<sup>1</sup>から海外研修自体が困難であることが分かった。

よって本研究では、協定校間における現職教員の研修としての短期留学の可能性を具体的に検討し、1週間から2週間程度の教員派遣に試行的に着手することを目的とした。試行の結果をふまえた上で、短期教員研修留学プログラムを確立させるとともに、本活動の意義を検証することをめざす。

## 2. 研究の目的

本研究では、協定校間における現職教員研修としての短期留学の可能性を具体的に検討し、1週間から2週間程度の教員派遣を試行的に着手することを目的とした。また、試行の結果をふまえて短期教員研修留学プログラム(以下、研修プログラム)を確立させるとともに、本活動の効果を以下の観点から検証する。

第一に、派遣される教員にとっては、①国際性を身につける好機となり、②外国における実践など日本とは異なる教育形態を学ぶ機会になる。これらは教員に必要な幅広い教養を意味する<sup>2</sup>。①「国際性を身につける」については、異文化理解を意図しており、②「日本とは異なる教育形態を学ぶ」については、現職教員の研究的力量の向上および実践的力量の向上につながることをめざす。

第二に、大学にとっては、①国際交流の促進、及び②高知大学の地域貢献に資することとなる。①「国際交流の促進」については、イエーテボリ大学との協定を活用して研究者・学生・大学院生のみではなく現職教員を派遣することが、国際交流をいっそう促進することになる。長期留学が困難な教員を対象とした研修プログラムを企画・運営することは、新たなニーズを発掘し、これまで以上に国際交流を促進することとなるであろう。②「高知大学の地域貢献」においては、現職教員は種々の事情から長期留学が困難であるので、教育関係施設視察と関係者間の討議を包括した研修プログラムを確立することで、高知大学が地域において新たな研修機会を提供できるなど、地域貢献に寄与できると考える。

## 3. 研究の方法

本研修プログラムを有意義なものとするために、障害児の交流教育研究などから導かれる事前指導<sup>3</sup>・事後指導<sup>4</sup>の充実、系統的な学習<sup>5</sup>などを研修プログラムに包括した。

具体的には、以下である。

- ①研修留学プログラムにかかわる事前学習を大学教員が行う。
- ②1週間から2週間の期間で、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校等、参加者の興味関心にそった研修先を訪問して、教育の実態を視察する。
- ③研修先訪問の際に関係者と協議する時間を設定する。
- ④帰国後、事後学習として大学教員とともに成果をまとめる。

#### 4. 研修プログラムの実際

##### 4.1 研修プログラムの確立

2006年8月から高知大学とイエーテボリ大学両校の代表者で協議を開始し、研修プログラムを起案した。2006年10月までに関係者に研修プログラムの内容を打診してプログラムを確定した。研修留学プログラムの内容を、高知大学では担当教職員が高知県教育委員会や高知市教育委員会に相談しつつ2006年12月までに派遣教員を2名選考し、2007年2月～3月の間に研修留学プログラムを実施し、2007年3月には成果のまとめを行った。

2006年度の派遣についてはプログラムの確立のための協力者として、高知大学教育学部の学部長裁量経費によって渡航費用の一部が資金援助された。しかし2007年度以降は確立したプログラムを利用した自費による研修活動として位置づくことになる。

##### 4.2 短期教員研修留学プログラム参加者

通常教育と特別支援教育の垣根をなくす「インクルージョン」が国際的主流であることを念頭におき<sup>6</sup>、通常教育関係者と特別支援教育関係者から対象を選考した。

表3. 短期教員研修留学プログラム参加者

所属・役職	研究テーマ
公立小学校・校長	スウェーデンの教育
公立特別支援学校・教諭	スウェーデンの自閉症教育

本研修プログラムを日本の教育に反映させることを考え、学校経営という視点を有する学校長が参加することは有意義であると考えた。また特別支援教育において連携が課題になっていることを鑑み、特別支援学校教諭の進路担当者の参加となった。

##### 4.3 事前学習

本研修プログラムを充実させるため、事前学習を設定した。事前学習の内容は以下である。

表4．事前学習の内容

	テーマ	講 師	内 容
第1回	スウェーデンについて学ぶ	教育学部教員	スウェーデンの地理・歴史・文化などの概要を把握する。
第2回	スウェーデン語について学ぶ	スウェーデン人留学生3名	挨拶や数字など簡単なスウェーデン語を練習する。
第3回	スウェーデンの教育について学ぶ	教育学部教員	見学先を想定してスウェーデンの教育・福祉制度などの概要を把握する。

スウェーデンの地理・歴史・文化などの概要を把握した後、スウェーデン人留学生に簡単なスウェーデン語を教示してもらった。最後に見学先を想定した学習内容を設定した。現職教員を対象とした学習会であるため通常業務に支障が出ない配慮が必要であり、18時30分～20時の各90分ずつ、2月上旬から中旬にかけて3回行った。

#### 4．4 短期教員研修留学プログラムの内容

研修プログラムは以下の日程で行われた。

表5．短期教員研修留学プログラムの日程

	日 付	主 な 活 動
1日目	2月26日(月)	・日本出国 ・スウェーデン入国
2日目	2月27日(火)	・基礎(小・中)学校訪問 ・知的障害特別学校訪問
3日目	2月28日(水)	・基礎(小・中)学校訪問 ・知的障害特別学校訪問 ・知的障害者就労機関デイセンター訪問 ・基礎(小・中)学校校長および学校教員と夕食会
4日目	3月1日(木)	・イエーテボリ大学見学 ・イエーテボリ大学日本語学科講義参観 ・イエーテボリ大学日本語学科学生および教員と交流
5日目	3月2日(金)	・成人知的障害者就労機関サムハル(SAMHALL)見学 ・障害者が働くカフェで昼食 ・知的障害のある子どもによるバイオリンバンドのミニコンサート
6日目	3月3日(土)	・自由行動
7日目	3月4日(日)	・スウェーデン出国
8日目	3月5日(月)	・日本入国

通常小・中学校、知的障害特別学校、大学、知的障害者就労機関、知的障害児の余暇活動などを視察した。大学では日本語学科の講義に参加し、ゲストティーチャーとして日本語を教授するとともに、スウェーデン人と日本語で交流した。

#### 4.5 事後学習

3月中旬に事後学習として、研修プログラム参加者と教育学部教員が、全体の総括および反省を行った。出された意見は以下である。

- ・教員の勤務体制、校務分掌、校長の権限、教育委員会との関係などの制度面、組織面の話も聞きたかった
- ・障害児・者のグループホームにも行ってみたいかった
- ・より重度の知的障害児の状況を学びたかった
- ・学校見学の際にはグループで分かれる場合があるのでその日のうちに情報交換したかった
- ・1日の終わりに情報交換やまとめの時間が欲しかった
- ・特定の教員の一日を見るなど実習生として入り込む形態も有効ではないか
- ・通訳に頼るだけではなく英語で自分で質問できるように準備すればよかった
- ・連絡手段として外国で使える携帯・メールを準備しておくことが必要
- ・スケジュールについては3, 4日目が疲れたのではないかと
- ・日数を延ばしてフリーの日を入れる10日から2週間のプランもありうる
- ・時期については8月に中旬から終わりが適切であろう

研修プログラムの内容面での改善や参加のための準備、具体的な日程や時期の設定について積極的に意見が出された。その後、報告会に向けての打ち合わせを行った。

#### 4.6 短期教員研修留学プログラム協力者

本研修プロジェクトの遂行には、イエーテボリ市において以下のメンバーの協力を得た。

表6. 短期教員研修留学プログラム協力者

所 属 ・ 役 職	役 割
イエーテボリ大学教育学部国際交流担当職員	全体の調整
基礎（小・中）学校校長	見学先コーディネート
イエーテボリ大学日本語学科教授	イエーテボリ大学にて交流
イエーテボリ大学日本語学科講師2名	イエーテボリ大学にて交流・イエーテボリ大学日本語学科講義において交流
イエーテボリ大学日本語学科学生3名	交流に参加
高知大学人文学部准教授（イエーテボリ大学に留学）	イエーテボリ市でのサポート

## 5. 報告会

今回は、2名の現職教員を派遣し、同時に8名の学生短期研究留学生を派遣した。そのため「大学間協定に基づく短期教員研究留学プログラムおよび学生短期研究留学報告会 スウェーデン・イエーテボリ市における研修旅行を中心に」という題目で、成果報告会を企画・実施した。概要は以下である。

期日：2007年3月26日（月）10時～12時

場所：メディアホール（高知大学 朝倉キャンパス メディアの森（図書館）6階）

内容：10：00～10：05 ①短期教員研究留学プログラムの概要報告

10：05～11：55 ②短期教員研究留学プログラム・学生短期研究留学参加者の発表

発表者	発表テーマ
公立小学校校長	「スウェーデンの教育事情」
公立特別支援学校教諭	「スウェーデンスタイルに学ぶ特別支援教育の具現化～見える化・自分化・日本化～」
高知大学教育学部3年生	「スウェーデンの性教育」
高知大学教育学部3年生	「スウェーデンにおける障害児・者の生活」
高知大学教育学部2年生	「スウェーデンにおける障害者の就労」
高知大学教育学部2年生	「スウェーデンの個に応じた教育～ポートフォリオを中心に～」
高知大学教育学部2年生	「スウェーデンの教育における見えるコミュニケーション」

11：55～12：00 ③まとめ

年度末の平日であるにもかかわらず、35名の参加があった。

## 6. おわりに

2006年度は様々な内容による、研修を中心とした交流を行った。高知大学とイエーテボリ大学間の交流は高知大学側では教育学部、医学部、人文学部の教職員が参加しており、今後はいっそう全学的な学術交流・学生交流へと進展することが期待できる。交流参加者も大学教員のみならず、学部生、大学院生、そして現職教員など多様である。

本研修プログラムの意義を研究の目的の視点から考察する。教員にとって、①「国際性を身につける」に関しては、視察先で自ら英語で質問するなど積極的に交流・学習を行っていた。またスウェーデン人との交流会・夕食会の機会を設定したことは、主体的に交流するきっかけになっていた。その後2007年4月には、訪問したイエーテボリ市の基礎（小・中）学校の教員5名が来高して、同様の短期教員研修留学プログラムを実施した。その際に研修プログラムに参加した学校長の小学校が受入を表明し、当該小学校において国際交流をテーマとした交流会を開催したり、お茶会を設定したりするなどの交流に発展した。

②「日本とは異なる教育形態を学ぶ」に関しては、報告会においてスウェーデンの実践をいかに「日本化」するのかという報告がされたり、日本において見てきたものをどのように位置づけるかの観点で議論が行われたりした。また、今後は実践を「見る」だけではなく、実習生のような形態で授業に「参加」したいという意欲へ繋がった。海外研修を個人の「思い出」とするのではなく、力量向上につなげるためには、事前・事後指導、研究テーマ、まとめ作業、発表の機会が重要であることも確認できた。今回の研修内容を実践に活かす機会を設けられるならば、知識と経験をいっそう活用することが期待される。

大学にとって、①「国際交流の促進」に関しては、初年度のみで35名が交流に参加し、内5名が現職教員であること、本研修プログラムで渡瑞したのは10名であること等から、交流の促進に寄与したことが分かる。

②「地域貢献」に関しては、高知県教育委員会との協議においても本研修プログラムは、新たな研修の機会が増えることとして大変歓迎された。

しかし今後の課題も明らかになった。第一に、研修プログラムに参加する教員の選定について、今後はより広く案内するために、高知県教育委員会を通じての参加希望教員の公募へと移行させたいと考えており、教育委員会との連携を強固にする必要がある。第二に、プログラムの時期の設定について



は長期休業中などが適切であるため、現地の状況も考慮しつつ8月中旬から下旬を検討するなど時期の調整が必要になる。第三に、現地でのコミュニケーションについて、英語準備の重要性が指摘された。第四に、プログラムの内容について、今回は見学が主体であったが実習生として授業に入り込む実習形態の提案があった。これらを今後具体的に検討したいと考えている。

平成18年度は教育学部長裁量経費によって、本研修プログラムが遂行された。今後はいっそう組織的な交流を推進する必要があるため、平成19年度の高知大学国際交流基金助成事業の援助を受け、組織としての体制確立をめざす所存である。

交流形態も高知県の教員とイエーテボリ市の教員、附属校園の教員とイエーテボリ大学研究協力校の教員、高知大学の教員養成課程の学生とイエーテボリ大学教育学部の学生、附属校園の子どもとイエーテボリ大学研究協力校の子どもなど様々なレベルがあり、領域も特別支援教育に限定せず全ての教科を対象にするなど、多様な交流について継続的に検討したいと考えている。

#### 註・引用文献

- <sup>1</sup> 例えば、教育公務員特例法第20条の2に、「教員は、授業に支障のない限り、本属長の承認を受けて、勤務場所を離れて研修を行うことができる」、とあるが「授業に支障のない限り」であるため課業期間中の研修は困難である。
- <sup>2</sup> 大沼直樹(2004)『教師の専門性をいかに高めるか～教養・指導方法・基礎知識～』明治図書、p.1.
- <sup>3</sup> 大谷博俊、貴志年秀、前川知子(1999)交流教育における障害児に対する健常児の態度及び障害児の自己評価の分析-情報の提供を事前学習に行った交流活動の試みを中心に-『和歌山大学教育学部紀要』49、pp.219-225.
- <sup>4</sup> 松本和久、徳田克己(1999)「小学生を対象とした障害理解教育プログラムの作成とその効果」『障害理解研究』3、pp.21-32.
- <sup>5</sup> 三上たみ、高橋智(1996)障害理解教育実践の方法論的検討-奈良教育大学附属中学校の実践を事例に-『障害者問題研究』第24巻、第3号、pp.271-281.
- <sup>6</sup> 前掲2、大沼直樹(2004)pp.27-28.

これなが かなこ

(高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門准教授)

